UDCTak

アーバンデザインセンター高島平

2017年度　年次報告

目　次

Ⅰ．2017 年度の主な活動 P.01

Ⅱ．大学等連携プロジェクト P.05

Ⅲ．デザインスクール P.29

Ⅳ．空間デザインと公共空間の活用方策検討 P.35

1.　プロムナード基本構想策定に向けた検討
2.　社会実験

Ⅴ．旧高七小跡地の再整備に向けた調査 P.47

Ⅵ．運営・情報発信 P.49

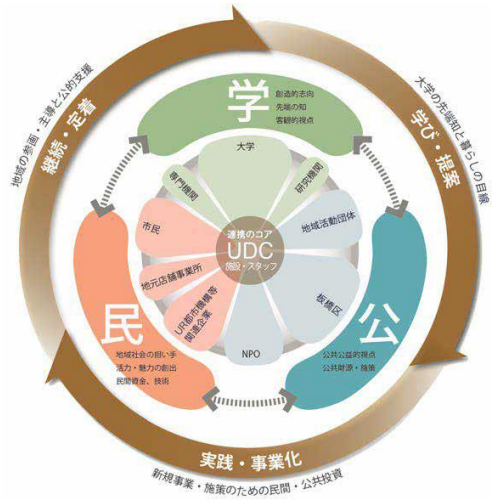
1.　運営委員会等
2.　情報発信

Ⅰ．2017 年度の主な活動

Ⅰ．2017 年度の主な活動

アーバンデザインセンター高島平（以下「UDCTak」という）は 2016 年 11 月に、「民・学・公」連携によるまちづくりの推進組織として設立されました。

板橋区が都市再生の指針として平成 27 年 10 月に策定した「高島平地域グランドデザイン（以下「グランドデザイン」という）」では、多くの人を惹きつけ、時を過ごし、住みたい、働きたい、暮らし続けるまち（願いに応え、みんなでつくる『高島平スタイル』）の実現に向け、４つのテーマ（①にぎわい創出、②ウェルフェア(健康福祉）、③スマートエネルギー(効率的なエネルギー利用)、④防災・防犯)と鉄道駅を中心とした交流核や生活核の形成、プロムナード(散策道）、歩行者・自転車ネットワークで構成するエリア単位の空間像が提示されており、UDCTak はそうしたまちづくりの推進に向け、参加と連携のプラットフォームとして機能することが求められています。



民･学･公連携の概念図

2017 年度の UDCTak の主な活動は、以下の通りです。

◆４つのテーマの実現

グランドデザインで示したテーマの実現に向け、大学等連携プロジェクトを始動するとともに、こうしたプロジェクトの周知、普及も目的としたデザインスクールを開催しました。

大学等連携プロジェクトのテーマは、「買い物支援」、「花壇づくりを通じた居場所づくりとネットワーク形成」、「ジョグ＆ウォークパトロール」、「防災ゲーム開発」、「高島平ヘリテージ」の５つとなっており、今年度は、主にウェルフェアや防災・防犯といったテーマを中心に活動を展開しました。

デザインスクールは、地域のまちづくりの課題等をテーマとして開催し、学習と交流の機会を設けました。

◆空間デザインと公共空間の活用方策検討等

空間デザインと公共空間の活用方策検討として、区のプロムナード基本構想策定に向けた提言・提案検討を昨年度に引き続き実施するとともに、プロムナードにおけるにぎわい創出の効果検証するための、社会実験を実施しました。

また、地域内外からその動向が注視されている旧高七小跡地について、本格的な検討に向けた準備として、有識者を交えた準備会を設置し、客観的な視点から独自の検討を行いました。

◆魅力の発信、PR

さらに、昨年度から引き続き、Facebook による情報発信を行うとともに、専用 HP を開設しました。また、紙媒体による情報発信としてニュースを発行しています。

高島平プロムナード活用社会実験「高島平グリーンテラス」の様子

[2017年度のUDCTakの主な活動]

年		2017									2018		
月		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
大学等連携プロジェクト	買物支援		事業者ヒアリング		利用実態調査				データ分析				
	花壇づくり（○活動 ◇ワークショップ）		花壇団体調査 ○	○	◇		○	花壇マップ作成 ○	○	◇	○	○	○
	ジョグ&ウォークパトロール		防犯アイテムアンケート			アイテム選定・制作		アイテム配布		防犯活動アンケート実施			
	防災ゲーム		防災ゲーム題材検討			ゲーム試作		試作品体験会		試作品改善	研究発表		
	ヘリテージ（○ミーティング）		企画・調査		まちあるき企画・展示準備 ○	○	○	展示・まちあるき	○		連続インタビュー ○		○
デザインスクール			● 防犯		● 防災			● ヘリテージ	● 花壇活動			● 民学公連携	● 子供
プロムナード基本構想策定に向けた検討（■研究部会 ◆勉強会）				■	◆	◆	■	◆	■ ★区に提言				■
社会実験				企画立案		調整・準備	実施（9/28～10/1）		検証・とりまとめ				
旧高七跡地を含む公共用地の整備研究準備会				■			■				■		
事務局運営（■運営委員会 ◆理事会）			■				■ ◆			■			■ ◆
情報発信		Facebook等による情報発信						★ニュース	★HP開設			★ニュース	

Ⅱ．大学等連携プロジェクト

II．大学等連携プロジェクト

大学等連携プロジェクトでは、グランドデザインに掲げる 4 つのテーマ（①にぎわい創出、②ウェルフェア(健康福祉)、③スマートエネルギー(効率的なエネルギー利用)、④防災・防犯）にもとづき、高島平地域の課題解決やまちづくりに向けて、大学等の協力・連携のもと、具体的な取組み、研究活動を実施しています。

高齢化問題に着目し、高齢者の生活やコミュニティ、健康、暮らしやすさ等をテーマに、買い物、花壇づくりを通じた居場所づくりとネットワーク形成といったプロジェクトを展開しました。

また、安全・安心をテーマに、日常生活における見守り活動の展開・普及をテーマとしたジョグ＆ウォークパトロールや、高島平ならではの特性を取り込んだ防災ゲームの開発にも取り組むとともに、高島平の歴史的文脈の掘り起しを通じて、地域住民のまちへの愛着の喚起と、新たなまちの楽しみ方の提案等につなげるヘリテージプロジェクトにも取組みました。

どのプロジェクトも今年度の成果を踏まえ、来年度も継続して取り組む予定となっています。こうしたプロジェクト活動を通じて、大学や地域団体とのつながりが増え、活動や連携の幅も広がり、高島平全体のまちづくりの推進に寄与することを期待しています。

[2017 年度のプロジェクト一覧]

名称	協力･連携	概要
1. 買い物 支援	東京大学 住宅･都市解析研究室 中央大学　助教　関口達也 ブルーチップ、地域店舗	高齢化に伴う買い物弱者のために運行されている移動スーパーの利用実態を調査し、現状の課題を抽出してその対策を検討し、買い物しやすいまちの実現を目指す。
2. 花壇 づくり	筑波大学　藤井さやか研究室 東京大学　大学院生有志	花壇活動を通じた「居場所」づくりとネットワーク形成をテーマに、景観づくりと交流を通じたウェルフェアの実現を目指す。活動団体の実態調査や交流イベント等を通じた担い手育成と活動の拡大支援を行っている。
3. ジョグ パト	東京大学 住宅･都市解析研究室 及び、大学院生有志 東京都健康長寿医療センター	安心･安全な環境づくりをテーマに、ジョギングなどの日常生活の中で、オリジナル防犯アイテムを身に着け、地域で見守りあう活動を推進。犯罪の起こりにくいまち、声の掛け合える住みやすいまちを目指す。
4. 防災 ゲーム	大東文化大学 飯塚裕介ゼミナール	災害対応･行動を学習･訓練することを目的とした防災ゲームの体験を通じて、災害に対する知識や災害時の判断力を養い、地域防災力の向上を目指す。
5. 高島平 ヘリテージ	東京大学 都市デザイン研究室 高島平観光協会（仮）	高島平誕の継承すべき都市空間を「高島平ヘリテージ」と定義し、まちの成立ちや経緯等の情報の整理･収集、一元管理を進め、それを可視化、体験化し、新たな楽しみ方等への提案へつなげる。

１．
買い物支援プロジェクト

協力・連携：
東京大学　住宅・都市解析研究室
中央大学　関口達也助教
ブルーチップ，地域店舗

１．目的・主旨

高島平地域では高齢化に伴い日常の買い物が困難な買い物弱者が増加しています。本プロジェクトではこの問題に対して、まず地域の買い物環境に関する課題を抽出します。具体的には、地域住民の方々の買い物行動の実態や、地域における買い物可能な店舗等の分布などについて調査を行います。

そして、得られたデータからその両者の関係性を分析します。そこから人々の買い物の不便や困難の原因となる要素を明らかにして、それを解消する方策を検討し、最終的には、住民の方々が日常の買い物を行いやすい便利なまちづくりへの貢献を目的とします。

初年度は、2016 年 11 月より高島平地域で運行されている移動スーパー「とくし丸」の利用実態について調査を行います。この調査結果に基づき作成された移動履歴と購買履歴を組み合わせたデータベースを用いて、地域の「どこで」、「何が」買われているかを分析します。そして、移動販売事業が高島平地域の買い物環境の改善に対して有する意義・課題について明らかにします。

また、次年度以降には、日常的に買い物を行う店舗やその評価（満足度・選択理由など）、利用手段・頻度などを地域住民に直接問うアンケートについても実施を行います。そして、移動販売の利用実態データとの組み合わせも行いつつ、より詳細かつ広範な観点から地域の買い物環境について解析を行います。

２．活動内容

・移動販売車のデータ収集

0) 2016 年 3 月
移動販売車とくし丸に GPS を搭載、利用実態調査の開始

1) 2017 年 7 月
高島平地域との比較分析のため、中板橋地域、大塚地域で運行されるとくし丸でも同様の利用実態調査を開始

2) ～2018 年 1 月
高島平地域を含む 3 地域でのとくし丸の利用実態データの収集

写真 1：移動販売車を利用する地域住民の方々

・プロジェクトの周知活動

1) 2017 年 6 月 14 日、10 月 23 日
東京大学大学院　工学系研究科都市工学専攻にて成果の一部の話題提供

2) 2017 年 10 月 6 日
中央大学　理工学部人間総合理工学科にて成果の一部の話題提供

3) 2017 年 12 月 9 日
首都大学東京大学院　都市環境科学

研究科都市環境科学専攻にて成果の一部の話題提供

4）2017 年 3 月 22 日、23 日(予定) 日本地理学会 2018 年春季学術大会にて、本年度の成果の発表

３．今年度の成果・到達点

移動販売車の移動履歴の取得のため、GPS（Garmin 社の eTrex10J）を高島平地域、中板橋地域、大塚地域で運行するそれぞれのとくし丸に搭載しました。その結果として得られた移動履歴データは2018年1 月 17 日時点のものとして高島平地域（週 2 回運行）で約 60 営業日分、中板橋地域（週 3 回運行）で約 75 営業日分、大塚地域（週 3 回運行）で約 55 営業日分でした。

今年度は、それらのデータのうち、2017 年 7 月中旬から 8 月下旬にかけてのデータを用いて分析を行いました。分析では、運営主体から提供された購買履歴データをさらに組みあわせて、各商品（注 1）が買われた場所に関するデータベースを作成しました。その具体的な手順として、まず、移動履歴データから一定のルールに基づき移動販売車が「停車」している時間と場所を推定しました。そして、購買履歴データに記録されたある商品が購入された時刻が、ある場所に停車していた時間内に含まれる場合、

図 1：データから得られる情報の一例

その商品はその場所で買われたと判断しました（図 1）。以下では、このデータベースに基づく分析から得られた成果をまとめます。

まず、上記の方法により購入された場所が特定できた商品は高島平 96.7%、中板橋 94.4%、大塚 88.2%であり、今回用いた方法の有用性が示されました。

また、移動販売により買い物が行われる地点と各地点で購入された合計商品数（注 2）を次頁の図 2 のように地図上で視覚化し、その空間分布に関する特徴を分析しました。その結果から、商品の購入が多く行われた（≒移動販売の需要がある）場所には、以下のような特徴がみられました。

・店舗までの距離は近くとも、急な坂や階段、大通りを渡らなければいけない場所（高島平地域では西台団地、高島平第 2・第 3 分譲住宅が該当）での利用が多い。
・そのような団地、高齢者用老人ホームなどでは移動販売車の滞在時間が長く、購入される商品の数も多い傾向にある。
・高島平地域では、戸建住宅地でも局所的に商品が多数購入される地点もみられた。

さらに、商品が購入された地点の特徴をより詳細かつ定量的に把握するために、以下の様な分析を行いました。

まず、最寄り店舗までの距離に応じ、高島平・中板橋・大塚の各地域に分布する道路を、「近い」～「遠い」の 4 段階に各地域内で数が均等になるように分けます。そして、移動販売車での商品の購入が行われた地点がどの類型の道路上にあるかを、地域ごとに集計します。高島平地域では最寄り店舗から「遠い」場所での購入が 80%を超え、他

の 2 地域よりも、店舗から遠い住民の利用が多いことが伺える結果が得られました

（中板橋地域は約 40%、大塚地域は約 35%）。

また、地域全体としての購入商品数を商品の種別ごとに集計してみると、高島平地域における上位 20 位の商品では、生鮮食料品に属する商品が 11 商品（野菜・果物 8 商品、肉・魚 3 商品）、惣菜に属する商品が 2 商品と、高齢者の食事摂取を支えうる重要な商品が上位に多く含まれていました。

以上の結果から、高島平地域における移動販売車の運行は買い物条件の悪い地域住民の生活補助になる可能性が示唆されています。

注 1：ここでの「商品」は、購買履歴データとしての会計伝票（1 会計で 1 枚発行）に記載された商品名で区別されます。そのため、同じバナナであっても、例えば「○○バナナ」と「バナナ△△」のよう

表 1 ：最寄り店舗からの距離別にみた停車場所の分布(単位：箇所)

距離分類	高島平	中板橋	大塚
近い	9 (6.8%)	28 (17.6%)	21 (17.4%)
やや近い	3 (2.3%)	36 (22.6%)	21 (17.4%)
やや遠い	12 (9.0%)	33 (20.8%)	37 (30.6%)
遠い	109 (82.0%)	62 (39.0%)	42 (34.7%)

（注 1 続き）に、伝票に記載される名称が異なる場合には、異なる商品として数えています。

また、図 1 に示した例や 3 章後半の商品種別ごとの集計の際には、各商品の名称に基づきそれぞれの商品を分類しました。

注 2 ：分析期間中に同じ購入場所で買われた商品の合計数です。ただし、今回は会計伝票への商品名の出現回数をベースに集計しました。そのため、1 回の会計で 1 種類の商品を複数購入した場合は 1 として数えています。また、同じ商品が別の会計でも購入された場合は各会計をそれぞれ 1 として数えました。

4．課題

本年度は、移動販売の利用状況の面から、高島平地域における買い物環境の改善に資する可能性を探りました。その結果、高島平地域における移動販売車の運行は、買い物条件の悪い住民の生活補助になる可能性が示唆されていました。

ただし、本年度の段階では、移動販売の利用者側の評価に関する情報は得られていません今後は、移動販売車のドライバーや利用者などへのヒアリングを通して、実際の利用者の視点からも移動販売が地域の買い物の

図 2 ：高島平地域における移動販売の利用場所と各地点での購入商品数の合計

利用者の視点からも移動販売が地域の買い物の環境の改善に寄与しているのかを調査する必要があります。

また、移動販売の利用者の比率は、地域住民全体からみれば、現時点では決して多くないと考えらます。そのため、今後は地域住民を対象とした調査により、広く地域の買い物環境を捉える必要があります。

具体的には、まず、地域住民が買い物を行う場所やそれに対する人々の意識を把握します。そのうえで、店舗での買い物に対する不便や困難の度合いと移動販売の利用状況・利用意思の関係などを分析します。その一連の過程の中で、地域の買い物環境の中での移動販売の位置づけやその重要性・課題について検討していく必要があります。

さらに、買い物弱者の問題は住民が単に「買い物が出来るようになった」だけでは十分に問題が解決されたとは言えないでしょう。この問題は、各自の買い物場所までのアクセス性や、購入できる商品の価格や質などに不満を抱くことなく買い物ができること、さらに、買い物ができないことによる人々の食事摂取や健康に関する問題の解消が実現されて初めての根本的に解決がなされると言えます。

そのため、今後の買い物支援プロジェクトでは、今年得られた移動販売のデータと地域の人々の買い物環境の調査により得られたデータを組み合わせた分析を進めることで、人々の買い物の不便や困難の原因になっている要素やそれが人々の食事・健康にもたらす影響を明らかにして、それを解消するための方策を検討していきたいと考えます。

５．来年度の目標・活動

来年度の活動目標としては、まず、今回得られた移動販売の利用状況を表すデータを用いた分析の深化が挙げられます。例えば、移動販売で購入される商品種別ごとの購入量・場所の偏りをみたり、移動販売車のドライバーなどへのヒアリングにより、移動販売の利用者の観点からの分析を追加して、移動販売事業が買い物環境の改善に寄与する可能性についてより詳細に検討していく予定です。

また、高島平地域の買い物環境に関する状況を、より多面的かつ詳細に明らかにするためのデータ収集・分析も必要です。例えば「４．課題」の項でも述べたように、より広く地域住民を対象にした買い物行動の状況や買い物環境に関する意識について調査を行う予定です。これらの調査により得られたデータを活用して、地域における買い物弱者の存在の有無について検討するとともに、人々の買い物の不便や困難の原因になっている、もしくは、原因となりうる要素を明らかにしていきます。そして、それらの問題を解消するための方策を検討し、住民の方々が日常の買い物を行いやすい便利なまちづくりの実現に寄与していく方針です。

２．
花壇づくりプロジェクト

協力・連携：
筑波大学　藤井さやか研究室
東京大学　大学院生有志

１．目的・主旨

本プロジェクトでは、花壇活動を通じた「居場所」づくりとネットワーク形成をテーマとして、花育てによる景観づくりと交流を通じたウェルフェアの実現を目指しています。初年度は、高島平地域の花壇活動団体の実態を調査し、交流イベント等を通した活動団体のネットワーキングを行い、コミュニティの醸成を図ることを目的として、活動に取り組みました。また、専門家によるワークショップを行い、継続的かつ自律的な花壇活動に向けた人材・スキルの育成を図るとともに、活動自体が地域の「居場所」となるよう、参加者の拡大と活動の普及を図ることも目的としています。

２．活動内容

①花壇団体調査

高島平地域の花壇活動団体を把握するため、既存の共同花壇の実態調査を行いました。板橋区と UR の紹介を得て、区立公園内にある共同花壇から３団体・4 花壇、UR 団地内の 3 花壇を対象としました。今回調査の協力を得られなかった団体や分譲団地内の花壇活動については、今後調査を追加していきたいと考えます。

・5-7 月：4 団体・7 花壇の共同花壇調査（現地調査及びヒアリング・表参照）
・9 月：花壇紹介マップ（図参照）を作成
・10 月：社会実験で展示
・11 月：スクールへの参加呼びかけ

②プロジェクト周知活動

地域内の共同花壇の場所や活動内容を紹介し、新たな参加者を勧誘します。そのため、UDCTak の社会実験と UR 高島平団地祭りにブースを出展しました。

・9/30-10/1：社会実験でパネル展示を行い、オープンハウスを実施。
・10/15：高島平団地祭りにブース出展（UR 共同花壇と共同実施）

③デザインスクールの開催

11/11 に UR 共同花壇を会場として、花壇のお手入れ体験と意見交換会を実施しました。

④UR 団地内共同花壇の花壇活動活性化

UR 共同花壇の花壇活動に参加しました。（5/29、6/10、9/3、10/1、11/11、1/13、2/3、3/10）

⑤花壇活動に関連したワークショップの実施

UR 共同花壇の活動と共同で、活動活性化と参加者拡大を目的としたワークショップを行いました。

・7/1：団地で栽培したドライハーブを使ったサシェとハーブ石鹸づくり
・12/9：団地内剪定素材を使ったクリスマススワッグづくり

３．今年度の成果・到達点

花壇団体調査や UR 花壇での実践から、参加者や周辺住民にとって、共同花壇が居場所的な空間となっていることが確認できました。特に花の好きな高齢女性が多く参加しており、重要なコミュニケーションの場となっていました。また花壇活動への直接参加に限らず、多くの人が散歩や買い物の際に花壇のそばを選んで通過していたり、活動者に声を

かけたりしている様子がみられました。

しかしながら、どの花壇においても、活動継続に向けた課題として、活動メンバーの拡大や負担の少ない管理に関する知識の不足、専門家の指導の必要性をあげています。今年度のデザインスクールでは、花壇調査を行った団体に案内を通知したところ、多くの参加があり、専門家の説明や助言に熱心に耳を傾ける様子がみられました。また花壇団体同士で、悩みの相談や情報交換・交流もあり、今後もこのような場を設けることへの要望が上がりました。

UR 共同花壇との共同活動では、花壇素材を活用したクラフトづくりが、新規の参加者獲得や花壇活動紹介に貢献していました。また定期的なお手入れ活動では、実践を通じて専門家からお手入れのコツやアドバイスを得られる講座への関心が高かったことが分かりました。

４．課題

花壇活動を通じた「居場所」づくりについては、地域内の共同花壇が一定の効果を上げていることが分かりましたが、一部の花壇では、既存地元組織の行政からの受託業務的位置づけとなっており、多様な参加者による自由なコミュニティ形成の場とはなっていません。

花壇活動団体のネットワーク形成により、各活動の活性化や閉鎖性の解消が期待できます。今年度はデザインスクールでの交流の機会しか用意できませんでしたが、各団体が集まるイベントや花壇を相互に訪問し合う仕掛けなど、交流の機会を検討する必要があります。

いずれの花壇も、手探りで活動を行っているため、花壇専門家の助言が強く求められています。一方で花壇専門家に依存した活動に陥ることなく、住民の自立した活動とするためには、専門知識だけでなく、活動メンバーのコミュニケーションの取り方や連絡体制づくりを支援し、自発的なやり取りができるようサポートする活動コーディネーターが不可欠です。

５．来年度の目標・活動

来年度は、調査やスクールでつながった団体の交流の機会を増やし、各活動の活性化を図ることを目標に活動を継続していきたいと考えます。具体的には以下の活動内容を検討しています。

① 分譲団地内を含む未調査の共同花壇の活動発掘調査：
現在把握している 6 花壇以外の花壇活動の調査を行う。

② 花壇活動の交流イベント・講座の実施：
UR 共同花壇のお手入れのタイミング（6 月又は 11 月）にデザインスクールと交流会の開催を行いたい。また花壇素材を活用したクラフト講座は、新規の参加者を広げる機会となるので、実施を検討したい。

③ オープンガーデンイベントの検討：
花壇マップ情報を拡充し、花のきれいな季節に花壇めぐりをすすめる情報提供を行う。花壇活動団体の協力を得られれば、花壇を回るウォーキングイベントの実施や案内サインの作成も検討する。策定中の板橋区緑の基本計画などにもみどりに関わる活動の活性支援の仕組みが多数検討されているので、活用可能な制度の検討を行う。

④花壇編専門家・コーディネーター派遣：

予算の状況によるが、花壇活動の活性化のために専門家の助言を必要としている団体は多いので、可能な範囲での専門家派遣を検討する。その際、他の花壇団体も参加できるようにし、公開講座的にお手入れのコツを学べる場としたい。また上述した交流イベント・講座と連動した実施も想定している。

④ 花壇活動の支援：

今年度活動を支援したUR共同花壇については、活動自立期に近づいているので、活動状況を見守りながら、定期的なお手入れなどの支援を継続する。

図１：高島平地域の花壇マップ

表１：高島平地域の花壇団体の概要

花壇名	管理団体 参加人数	活動頻度	課題	
高島平 第２公園花壇	UR 高島平団地 居住者 ４人、主に２人	年２回(植え替え) 気づいた時に水遣り・ 手入れ	水道が遠く、ビニール袋を用いて水遣り 倉庫がない 参加者不足、高齢化	
高島平 第４公園花壇	愛護協力会 ４～５人	年６-７回	花泥棒がいる 世代交代ができていない	
高島平 第７公園 第１･第２花壇	高島平７丁目 町会 14 人	毎週土曜日 年２回(植え替え)	高齢化 作業用機械を使いこなせない ゴミの不法投棄 近隣住民からの苦情	
さわやか花壇 (UR 高島平団地)	5～10 人	月１回 植え替えや手入れ 年２回クラフト作り 毎回専門家が指導	リーダーのなり手がいない	専門家派遣が永遠に続くわけではない。各花壇で課題が異なるので、それぞれの活動継続方法を検討する必要がある
パルテール (UR 高島平団地)	5～6 人		日当り悪い 蚊の発生	
にこにこ花壇 (UR 高島平団地)	１人＋近隣保育園園児･職員		参加者が少ない 管理が保育園頼り	

写真１：さわやか花壇の活動
お手入れ後にハーブでお茶やチーズを楽しむ

写真２：ニコニコ花壇の活動
近隣の保育園児と一緒に植え替えを実施

写真３：パルテールの活動
花好きな住民の自発的な活動が育つ

写真４：社会実験でのオープンハウス
お手入れで切り取った花をプレゼントに

写真５：花壇素材を使ったクラフト WS
切り取ったラベンダーを乾燥させてサシェづくり

写真６：団地祭りに出店
住民が子ども達にサシェづくりを指導

３．
ジョグ&ウォーク
パトロール高島平

協力・連携：
東京大学　住宅・都市解析研究室
東京大学　大学院生有志
東京都健康長寿医療センター

１．目的・主旨

高齢化が進み、一方で子育て世代を呼び込むことが課題となっています。高島平地域では、あらゆる世代にとっての安心・安全な生活環境づくりが大きなテーマとなっています。ジョグ&ウォークパトロール（以下ジョグパト）は、ジョギングやウォーキング、ペットの散歩などの日常活動の中で、地域で見守りあう活動を広げていくためのプロジェクトです。

ジョグパトは 2014 年 11 月に防犯パトロール活動として茨城県つくば市で始められたのを最初に、その後全国に広がっています。いずれの地域でも、子どもや女性に対する犯罪等の防止と犯罪不安の低減、住民等の意識向上を目的とし、揃いのデザインの見守りアイテム（ビブス、T シャツ、アームバンド等）を住民等が身に着け、ジョギングやウォーキングをしながら地域を見守り、犯罪の起こりにくいまちづくりを目指しています。

高島平地域においては、プロムナードを中心に犯罪不安が高く、加えて、地域内での移動時に困難に直面します。高齢者も増加しつつあることから、高齢者に対する見守りも活動目的に加え、老いても安心して暮らせるまちづくりを目指しました。

２．活動内容

① 2017 年度第 1 回デザインスクール
（2017 年 5 月 13 日（土））

警視庁高島平警察署と板橋区防犯協会との共催で、警視庁による「防犯活動推進員等研修会」を兼ねて、東京大学樋野公宏准教授（UDCTak 副センター長／警視庁建物防犯協力員）が「プラス防犯の考え方と高島平地区への提案」というテーマで講演を行いました。高島平地区の住民に加え、高島平署管内の町会・自治会、防犯協会関係者など総勢 144 名が参加しました（図 1）。

図 1：デザインスクールでの講演の様子

「プラス防犯」とは誰もが参加しやすく継続的な活動を目指し、日常活動に防犯の視点を加味することで、ジョグパトはその具体的な活動のひとつです。講演を通じてこの考え方を理解してもらった後、班に分かれて高島平らしいプラス防犯の活動やジョグパトの見守りアイテムについて、ワークショップ形式で話し合いと全体発表を行いました。話し合いの途中にはアンケートを配布し、パトロール活動で身に着けたいと思うアイテムを尋ねた（図 2）。114 名が複数回答で回答し、投票数の多かった順に、下記の結果であった。

1 位　ビブス（52 人）
2 位　アームバンド（42 人）
3 位　リストバンド（41 人）

４位　バンダナ（16 人）

このほか、19 人が自由記述欄に、選択肢になかった「帽子」を記載しました。バンダナは少なかったのですが、自由記述欄、あるいはワークショップでは「利用方法がいろいろ考えられる」「使い方を提案してあげる必要がある」といった意見がありました。これらの結果をもとにアイテムの種類とデザインを決め、秋頃の配布を目指すこととしました。

図２：デザインスクールで配布したアンケート

② 見守りアイテムの選定とデザイン

デザインスクールでのワークショップとアンケートの結果を受け、東京大学住宅・都市解析研究室と大学院生有志が、ビブスとバンダナの 2 種類をジョグパトのアイテムとして選定しました。ビブスはアンケートで最も得票数が多く、バンダナはワークショップで肯定的な意見が多く、腕やバッグ、ペットのリードに付けるなど、使い方を提案することで参加者を増やせそうだと考えたためです。

2017 年 7 月から 8 月に掛けては、高島平二丁目団地内に「高島平ココからステーション」を設置する東京都健康長寿医療センター（板橋区栄町）の専門家にも意見を求めました。認知症の方への対応の際には、驚かせないこと、急がせないこと、自尊心を傷つけないという３つの基本姿勢が重要であることなどを、アイテム配布時の手引き（図 3）にも記載することとしました。ビブスとバンダナのデザインは上記研究室の学生および教員が担当しました。デザインにあたっては見守りに使えるだけでなく、UDCTak の認知度向上にも寄与することを目指しました（図 4,5）。

図３：ジョグパトの活動の手引き

図４：ビブスのデザイン（背面）

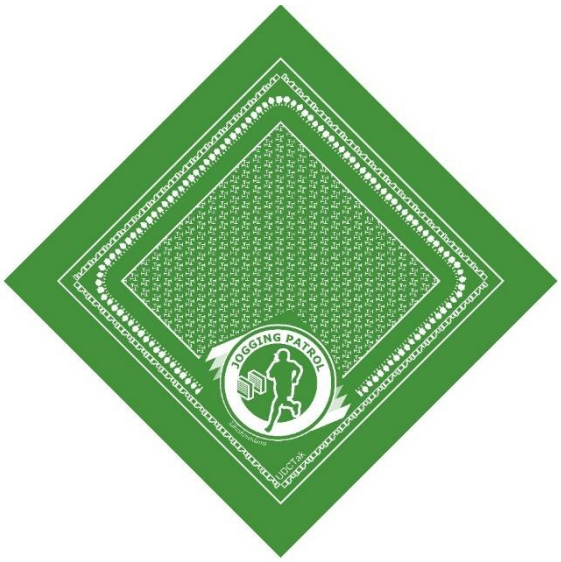


図 5：バンダナのデザイン

③ 社会実験「高島平グリーンテラス」でのアイテム配布（2017 年 9 月 29,30 日（金･土））

2017 年 9 月 28 日からの 4 日間にわたり、高島平緑地（高島平プロムナード）で行われた社会実験「高島平グリーンテラス」でジョグパトの活動内容をパネル展示するとともに見守りアイテムを配布し、高島平地域におけるジョグパトを開始しました。

会場に設けられたブースでは、ジョグパトの手引きを紹介するとともに、希望者へ見守りアイテムを配布しました（図 6）。配布時には高島平地域在住、在勤または在学することを身分証等で確認するだけで、個人情報は預からないこととしました。

社会実験後も 10 月 15 日の高島平ロードレースや 29 日の高島平まつりで見守りアイテムを配布しました。また、東京都健康長寿医療センターが運営する高島平ココからステーション（高島平二丁目）にも手引きとアイテムを置かせてもらい、配布を続けています。

2017 年末（43 人配布時点）での参加者属性は以下の通りです。

- 女性が 56%でやや多い。
- 40 代が 31%と最も多く、若い世代を巻き込めている 60 歳以上も 50%と多い。
- 職業は多い順に勤め人 33%，主婦･主夫 26%，無職 21%である。
- 60 歳以上の多さを反映し、ウォーキング時に使いたい参加者が 64%と多い。ジョギングは 12%のみである。

図 6：高島平グリーンテラスでの配布の様子

④ ジョグパト参加者へのアンケート

参加者には見守りアイテム配布時に、UDCTak で用意した封筒に住所と氏名を記入してもらいました。その封筒を使い、2017 年末に、ジョグパトに対する評価や、ジョグパトによるコミュニティの広がりを確認するためのアンケート調査を郵送しました。

ジョグパトに対する評価としては、地域に対する帰属意識（82%）や防犯に対する意識（73%）など意識面の変化を挙げる参加者が多かったです（図 7）。高齢者や体の不自由な方など困っている人を気にかけるようになったという参加者も 64%と多かったです。また、ジョグパトのねらい通り「他の防犯活動より気軽に参加できた」という参加者が

半数を越えました。

一方で、参加者数が限定的だったこともあり、「ジョグパトについて人と話した」という参加者が数名見られた程度で、他地域のようなジョグパトによるコミュニティの広がりはあまり見られなかった。

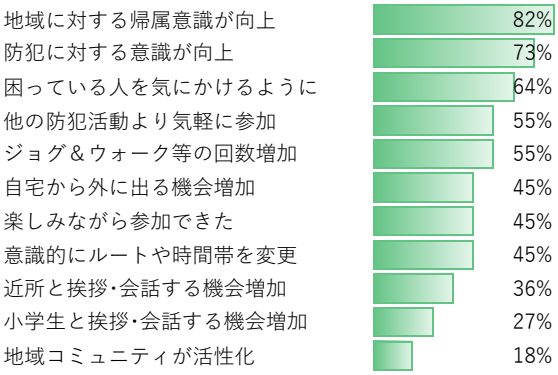


図 7：ジョグパトに対する評価
（5 択でそう思う、ややそう思うの合計）

3．今年度の成果・到達点

今年度は年度初めの予定通り、ジョグパトの見守りアイテムを秋に配布することができました。デザインスクールに 144 名という大勢の参加者を集めて行った意見交換がデザインにも反映されました。アイテムを配布したイベントは天候に恵まれませんでしたが、2018 年 1 月末までにバンダナ 12 枚、ビブス 55 枚を配布しました。

4．課題

引き続きジョグパト参加者の募集を続けますが、活動の周知が課題です。UDCTak の認知度が高まったり、ジョグパトのアイテムを地域内で日常的に見掛けたりするようになれば、活動が活性化するものと考えます。現時点では UDCTak 主催あるいは地域内のイベント時に配布したり、「高島平ココからステーション」に置かせてもらったりしていますが、他の配布方法も引き続き検討する必要があります。

また、この活動を支えてきた大学院生 2 名が修了・就職したため、運営メンバーの確保も大きな課題です。

5．来年度の目標・活動

先述の通り、来年度も引き続きジョグパト参加者の募集を行い、参加者 100 名を目指します。また、来年度は高齢者が安全に移動できるまちづくりを目指し、地域診断やマップづくりを行うことを予定しています。

4.
防災ゲームプロジェクト

協力・連携：
大東文化大学環境創造学部
飯塚裕介ゼミナール

1．目的・主旨

本プロジェクトは、防災ゲームによって災害時の状況を疑似的に体験した経験を通じて、住民の防災意識や関心を高めることを目的としています。

本年度は、災害履歴やハザードマップ、現況の防災対策などに関する調査を行って、高島平地域の防災リスクを整理した上で、高島平の実情にマッチした高島平版防災ゲームを試作します。

2．活動内容

(1) 高島平地域の防災リスク把握
実施期間：2017 年 6 月～8 月初旬
内容：高島平地域の災害履歴やハザードマップの調査、現況の防災対策の状況に関する調査を行って、地域の防災リスクに対する理解を深め、高島平版防災ゲームの題材を検討しました。

調査の結果、団地内は高齢の単身世帯が多いことが分かりました。災害時要援護者の主要層である高齢者の増加から、災害時の安否確認が困難になるため、住民同士の横のつながりが重要であると考えました。このことから本プロジェクトでは、住民同士の安否確認を題材とした防災ゲームを開発することとしました。

(2) 防災ゲーム試作品の製作
期間：2017 年 8 月～9 月
内容：前ステップでの検討を踏まえて、高島平ならではの内容を盛り込んだ防災ゲームを試作し、「ご近所さん安否確認ゲーム」と仮称しました。

本ゲームは、高島平団地の高層住棟における住民主体による安否確認をモチーフにしたボードゲームであり、速やかな安否確認には住民同士の横の連携や日頃からの住民コミュニティの醸成、災害時要援護者リストの事前整備などの重要性への理解を深めることを意図したものです。

図 1：ゲームボード（試作）

図 2：アイテムカード（試作）

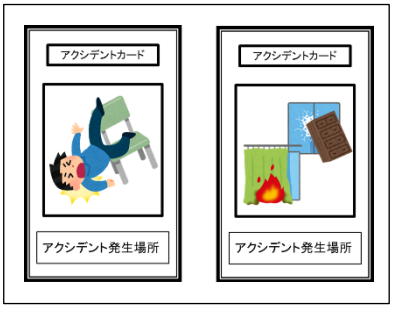


図 3：アクシデントカード（試作）

写真 1：パネル展示の様子

ゲームの概要は以下の通りです。

複数のプレイヤーが協力して住棟内に暮らす各住民の安否確認を行い、規定ターン内に救助や治療を必要とする方（災害時要援護者）を全て発見できればプレイヤー側の勝利となります。

プレイヤーは手分けして各部屋を直接訪ねたり電話を掛けて住民の安否を確認していくが、サイコロの目によって時折アクシデントが発生し、新たなケガ人が発生したり、廊下や階段が通行できなくなったりするため、プレイヤー同士が連携して臨機応変に対応することを求められます。

(3) 高島平グリーンテラス会場におけるパネル展示と防災ゲーム試作品体験会の実施

期間：2017 年 9 月 30 日～10 月 1 日

内容：活動内容を紹介するパネルを作成し、UDCTak 主催により開催されたイベント「高島平グリーンテラス」において展示しました。また、同イベントにおいてゲームの体験会を実施しました。

図 3：展示パネル（一部）

写真２：防災ゲーム体験会の様子

体験会の参加者は男性 10 名，女性 10 名の計 20 名，年齢は 12 歳以下 1 名，13 歳～22 歳 5 名，23～39 歳 6 名，40 歳～59 歳 7 名，60 歳以上 1 名でした。

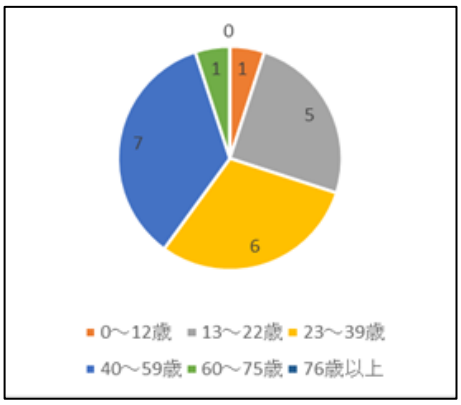


図４：防災ゲーム体験会参加者の年齢層

(4) 試作品の改善

期間：2017 年 10 月～2018 年 1 月

内容：体験会参加者に対して行ったアンケートの結果や、プロジェクトチーム内での検討から、ゲームの問題点を検討し修正作業を行いました。また、1 月 31 日に開催されたゼミ内の研究発表会において、プロジェクトに参加した学生らが活動内容の報告を行いました。

写真３：ゼミ研究発表会の様子

３．今年度の成果･到達点と課題

体験者からはゲーム体験を通じてご近所同士の交流、災害後の地域の連携、災害時要援護者の把握など、日頃からの交流や必要な対策に気付くことができたという感想

が多く寄せられており、当初の開発意図は本試作においてもある程度は達成できたものと考えられます。しかし、ゲームのルールやゲームボード、各種カードの種類・効果には改良の余地が多く残されているため、今後の検討の中で改良していきたいところです。また、ゲームの設定やルールを分かりやすく伝えられるよう、説明やファシリテートの方法の改善、ルールブックの整備なども併せて進めていきたいと考えます。

４．来年度の目標・活動

来年度は本年度に試作したゲームに改良を加えて完成させたいと考えています。また、地域の中高生を含む市民への防災教育への展開を進めて、ゲームによる防災教育の普及啓発を進めていく方針です。

５．
高島平ヘリテージプロジェクト

協力・連携：
東京大学　都市デザイン研究室
高島平観光協会（仮）

１．目的・主旨

❶　高島平の歴史的文脈の公民学連携のもとでの掘り起こしを通じて、住民、市民の方々の自分たちの地域環境に対する関心、愛着を喚起・醸成すること

❷　高島平の歴史的文脈に関わる史料を広く収集し、これからの高島平の再生まちづくりの基礎情報として、デジタルアーカイブ等の共有可能なかたちでの整理、公開を図ること

❸　高島平の再生にあたって継承すべき地域の歴史的文脈を明らかにし、行政の計画策定への関与やボトムアップの活動を通じて、その文脈の保全や活用に寄与すること

２．活動内容

2017 年

■７月８日（土）：キックオフミーティング
・プレゼン：プロジェクトの趣旨、事前作業説明
・フリーディスカッション「ヘリテージリストアップ」
→高島平とその周囲との関係、特に周辺に残る水系の記憶への着眼

図１：プロジェクト告知ポスター

■８月３日（木）：第２回ミーティング
・プレゼン：周囲との関係性から見た高島平、自主管理歩道の現状
・フリーディスカッション「1967 年の住宅地図を囲んで」
→高島平誕生以前の地域構造を伝えるポイントの確認

写真１：ミーティングの様子

■9 月 12 日（火）：第 3 回ミーティング
・プレゼン：プロムナード社会実験での展示・まちあるき企画提案
・フリーディスカッション「まちあるきルートの検討」
→川の手を中心としたルートの設定、山の手の文脈（崖上集落との関係）の確認とアプローチ方法の検討

■9 月 28 日(木)～10 月 1 日(日)：
高島平グリーンテラス展示／デザインスクール
・展示　パネル（概要、「むら」の構造、オリジナルヘリテージ、形成と変容）、ヘリテージテーブル
・まちあるき企画「高島平の読み解きまちあるき（川の手編）」

■10 月 23 日（月）：第 4 回ミーティング
・プレゼン：社会実験での展示・まちあるきの報告、山の手への眼差し（坂道、古道など）
・フリーディスカッション「山の手の文脈をどう見出していくか」
→崖上集落と高島平との空間的、社会的繋がりに関する仮説構築とインタビューによる解明が必要

■11 月 21 日（火）：第 5 回ミーティング
・プレゼン：公文書館資料の紹介、川の手の文脈関係（川と橋、畜産）
・フリーディスカッション「山の手の文脈の読解　榎本一郎氏（四葉出身）による解説を中心として」
→連続インタビュー者候補出し、インタビューの実施・記録方法の検討

2018 年

■1 月 18 日（木）：第 6 回ミーティング
高麗正夫氏（こうま幼稚園園長、現（3

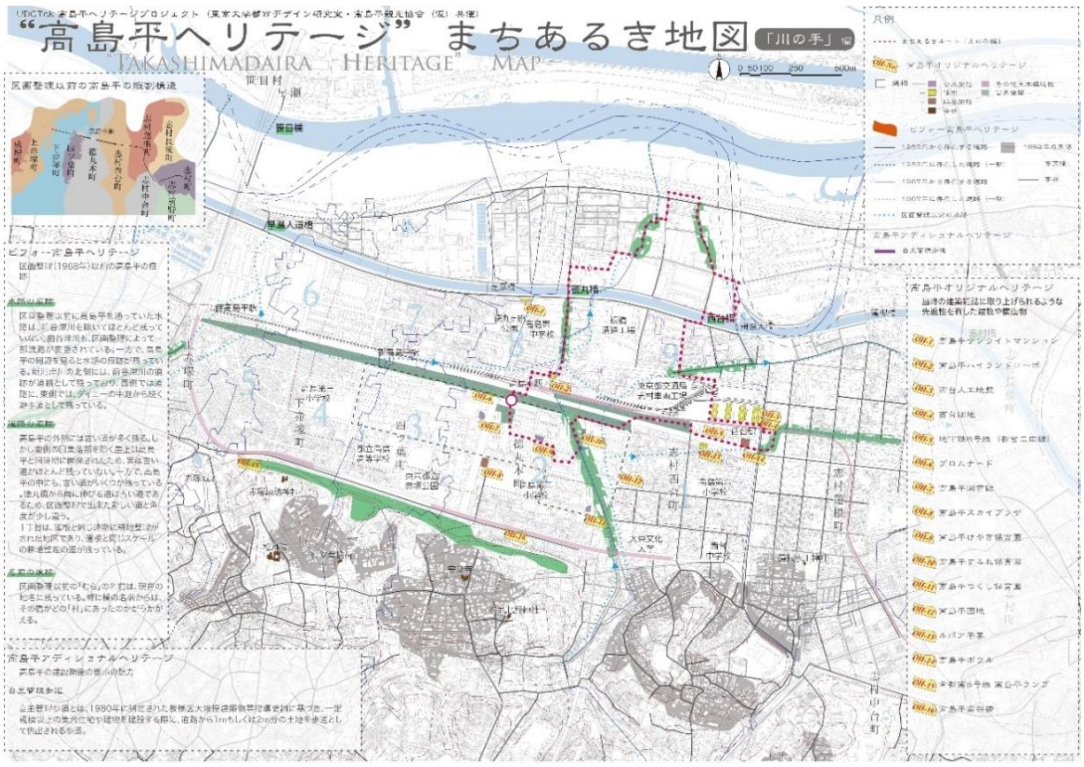


図２：高島平ヘリテージ　まちあるき地図

代目）高島平８丁目町会長）山の手インタビュー

・崖上集落（西台、徳丸本町、四葉、大門…）と高島平開発との空間的・社会的つながりを中心として、高島平についての理解を深める。

1　各集落の歴史的構造

2　高島平開発時の土地動向（換地、売買の実態）と居住開始期の環境形成過程

3　現在に至るまでの集落と高島平との関係の変遷

■３月５日（月）：第７回ミーティング

田中一男氏（高島平商店会長）山の手インタビュー

趣旨は第６回インタビューと同様。

３．今年度の成果・到達点

❶推進体制の構築

今年度、最初に Facebook およびプロムナード検討部会のワークショップでの告知、参加呼びかけを行った結果、東京大学都市デザイン研究室メンバー4 名、高島平観光協会（仮）の 2 名に加えて、高島平地域の住民の方 3 名がコアメンバーとして参画することになりました。これらコアメンバーに加えて、回によっては区関係部署のメンバーや区外で関心のある方なども参加しました。まず第一の成果は、こうしたプロジェクトの推進体制を整えることができたことです。

❷重層的フレームワークの設定

ヘリテージプロジェクトでは、当初は高島平の区画整理や区画整理直後の時期に建設された建築物等をオリジナルヘリテージとして捉え、それらのリストアップや現状把握を行うことを想定していたが、コアメンバーで議論した結果、以下のようなかたちで、重層的な視点で高島平の地域環境を捉えるというフレームワークの設定を行うことができました。

層１：高島平誕生以前の地域構造（川の手、山の手）

層２：高島平誕生時の先進的な構想や意図（区画整理、建築物・構造物）

層３：高島平誕生後のこの半世紀の間の場所創成（ビルトアッププロセス、自主管理歩道、生活の記憶）

❸川の手、山の手の文脈の解明

とりわけ、コアメンバー間では１の層への関心が高かったため、集中的に調査を進めることにしました。結果として、新河岸川を越えて、荒川までの地域との地理的な連鎖、あるいは新河岸川開設以前まで遡る地域環境との時間的な連鎖という「川の手」の文脈が解明され、まちあるきによってそのヘリテージを確認することができました。次いで、板橋崖線上の集落と高島平との不動産所有を通じた人的関係性を一つの着眼点として、「山の手」の文脈の解明に取り組んだ。「山の手」の文脈についての解明は途中段階ですが、現段階においても、現在の高島平というフラットな領域を、かつての集落単位、つまり崖上から川までをつなぐ縦の領域によって分割ないし拡張することで、高島平の今後のあり方を考える広い視野を獲得することができたと考えています。

４．課題

重層的フレームワークのうち、層１のみならず、層２、層３の解明にも力を入れていく必要があります。推進体制としては、さらなる参加者の募集を行うとともに、コアメンバー間の役割分担等についても検討を行う必要があります。来年度はそうした課題をクリアした上で、プロジェクトの成果を広く共有するための取り組み（展覧会、デジタルアーカイブ）が求められると考えます。

５．来年度の目標・活動

来年度は、現在進行中のインタビューを継続し、文脈の解明を行っていきます。そして、そうして得られる成果を区民、地域の方々と共有するために、2019 年 1 月～3 月にかけて、板橋区役所一階ロビーで展示を実施する予定です。同時に、ウェブサイトないし冊子等を作成する予定です。

Ⅲ．デザインスクール

Ⅲ．デザインスクール

デザインスクールは、地域交流の活性化やまちづくりの機運醸成を図ること、またまちづくりの担い手を育てることを目標とした講座で、建築やまちづくりの学識経験者や大学生、実務に携わる企業や行政の職員などと地域住民が、まちづくりの課題等について話し合い、実際のまちづくりや空間デザインにつなげていくことを目的としています。

2017 年度は地域との連携強化や UDCTak の活動 PR、普及を兼ねて、大学等連携プロジェクトのテーマを中心に、全 6 回実施しました。

初年度ということもあり、講義形式、ワークショップ形式、体験型からまち歩きなど、様々なタイプのスクールを試行的に実施しました。

◆第 1 回「防犯」

日時：2017.05.13(土)13：30～15：45
場所：高島平区民館 3 階ホール

第 1 回のデザインスクールは、高島平警察署と板橋区防犯協会と UDCTak との共催で「防犯」をテーマに実施しました。

樋野公宏氏

悪天候にも関わらず 144 名の方にご参加いただき、子供、女性に対する犯罪の未然防止に向けた「プラス防犯」の考え方について東京大学　樋野公宏准教授に講義いただきました。

「プラス防犯」とは、誰もが参加しやすく継続的な活動をめざし、日常活動に防犯の視点を加味することであり、その具体的な活動であるジョグパトについても、事例とその効果等について紹介がありました。

講義の後、班に分かれてプラス防犯や防犯アイテムのアイデアについて話し合い、その結果をグループ毎に発表しました。

グループでの話し合い

発表の中で、地域の方々は既に防犯活動に積極的に取組まれていることがわかり、このジョグパトの取組みにより、高島平地域の防犯活動がより広く普及発展していくことが期待されました。

このアンケートの結果をもとに防犯アイテムが制作・配布され、高島平における見守り活動が開始しています。（防犯アイテムによる見守り活動（ジョグ＆ウォークパトロール）の詳細は p.12 参照）

◆第 2 回「防災」

日時：2017.05.13(水)17：00～18：30
場所：大東文化大学 3 号館 30111 教室

第 2 回のデザインスクールは、「防災」をテーマに大東文化大学の飯塚裕介先生に講義いただきました。

平日の夕方の開催でしたが、62 名の方にご参加いただきました。大学での開催だったため、学生の参加が多い中、ゲームや VR を使った防災教育や簡単に取り組める防災対

策、高島平地域の災害リスク等について講義いただきました。

飯塚裕介氏

当日実施したアンケートでは、新しい防災教育や地域の防災対策等について大変興味深く、防災への意識が高まった等の感想をいただきました。

講義の様子

また、当日の意見交換の中で出された、防災訓練では安否確認が課題であること、団地ならではの災害対策が必要だという意見は、その後の高島平版の防災ゲームの開発に活かされています。（防災ゲームの詳細は p.16 参照）

◆第３回「高島平ヘリテージ」

日時：2017.09.30(土)13：30～17：00
場所：高島平地域内（川の手エリア）

第３回は、「高島平ヘリテージ」をテーマに社会実験「高島平グリーンテラス」のプログラムの一環として、まちあるき形式のデザインスクールを実施しました。

中島直人氏

高島平のまちを見直す新しい視点の獲得を目的として、高島平駅前から新河岸・荒川方面へ、高島平の「川の手」の歴史的文脈をたどるルートを 15 名の参加者で歩きました。（まちあるきのルートは p.21 参照）

まちあるきの様子

各スポットスポットでは、「高島平駅の駅舎デザインでは、周囲の直線を基調とした団地の建物との差別化を意識して、円を多用している」「高島平の市街地の特徴の一つが民地である自主管理歩道の集積であるが、公共空間としてうまくネットワークされていない」「この道の道路線と沿道の建物の壁面線のわずかなずれは、耕地時代の軸と区画整理の軸との差異を表している」「新河岸川を越えて、前谷津川の痕跡をたどっていくことで、高島平と荒川との繋がりが見えてくる」といった形成史、計画史からの読み解きが披露され、それを受けて、参加者による活発なヘリテージ談義が交わされました。

まちあるきの様子

◆第４回「花壇活動を通じた居場所づくりとネットワーク形成」

日時：2017.11.1(土)
　　前半 09：15～12：00
　　後半 13：30～15：30
場所：UR 高島平団地集会所・共同花壇

藤井さやか氏

第４回のデザインスクールは、「花壇活動を通じた居場所づくりとネットワーク形成」をテーマに、午前午後の 2 部構成での開催となりました。午前中は専門家とともに行う花壇の植替え作業。色の調和や苗木の配置の仕方、水やりのコツなどについてわかりやすく説明を受けた後、ベテランから初心者まで、和気あいあいとした雰囲気の中、参加者自ら植替え作業に挑戦しました。

午前中の花壇活動

午後の部は「コミュニティガーデンの始め方、広げ方」について筑波大学の藤井さやか准教授に講義いただいた後、専門家も交えて花壇活動の楽しさや課題等について活発な意見交換が行われました。

高齢化や人手不足など、継続するための課題もある中で、必要不可欠なのは「お茶の時間」。作業をした後に、花壇の恵みを活用したお茶とともに、コミュニケーションの時間を共有することが大切だということでした。

美味しいハーブティーとハーブチーズを頂きながら、笑いの多い楽しい時間となり、花壇活動がすでにみなさんの居場所になっていることを実感しました。（参加者２４名、花壇づくりプロジェクトの詳細は p.8 参照）

午後の意見交換の様子

◆第５回「民学公連携まちづくり」

日時：2018.02.24(土)10：00～11：30
場所：高島平地域センター　第一洋室

三牧浩也氏

第５回のデザインスクールは、「民学公連携のまちづくり」をテーマに、UDCK（柏の葉アーバンデザインセンター）の副センター長である三牧浩也氏を講師に迎え、そもそも UDC とは何なのか、他の UDC ではどのようなことをやっているのかということをお話しいただいた後、今後の高島平における UDCTak の取組み等について、参加者の皆さんと一緒に議論しました。

以下に一部講義の内容を紹介します。

▼アーバンデザインセンターとは

民学公の色々な人たちが、従来の立場を超えて、街の未来のために一緒に議論していく。どういう街をつくっていくか議論をして、その

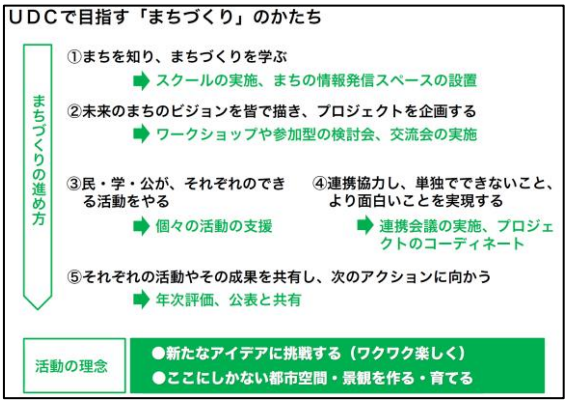
将来像をデザインして、一緒にそのプロジェクトを進める場所がアーバンデザインセンターであると言えます。

そして、みんなで一緒に議論をする「連携のプラットフォーム」、みんなの意見を整理してコーディネートする「まちづくりの専門機関」、まちの情報を集めて発信する「情報発信基地」の３つが整うことにより、UDC の機能をより効果的に発揮することができます。

図の提供：UDCBK

▼UDC で大切なこと

地域の人たちと一緒にまちの暮らしを創っていくためには未来志向であることが大切であり、常にわくわくするような新しいアイデアに挑戦することが大切です。他の UDC でも、様々な活動が展開されていますが、みんなが楽しめているかどうかが継続するためにも非常に重要なこととなっています。

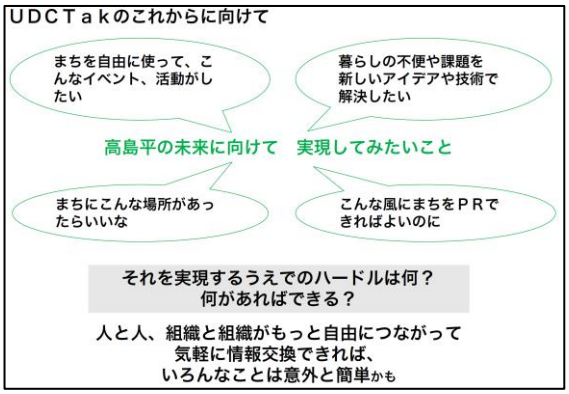


▼UDCTak の今後の取組みと課題

色々な人が関わりながら、一緒に考えて、やってみて、それを街に定着させていくということを繰り返しながら、街をより魅力的な街にしていく、その中心的な役割を担うのが UDC です。

例えば、高島平で目指す幸せな健康長寿社会、また子どもが生き生き育つ高島平などの将来像をデザインして、区、住民、大学、企業などがそれぞれにできることを連携して、プロジェクトを一緒にまとめ上げるということが必要であり、そのつなぎ役を担うのが UDCTak の役割です。

そうすることで、単独ではできないことができるようになり、それがまた次の活動へとつながって、どんどん面白いことがまちに生まれてくるようになるといいなと思います。



誕生してから一年半の活動の中で、徐々に連携の場が生まれ、HP やニュースによる情報発信もしてきていますが、まだまだ足りない部分が多く、拠点を持つことや、情報発信の方法などの課題も多くあります。

柏の葉でも１０年かかっているので、簡単ではないことですが、今後 1～2 年でしっかりと基盤を整えながら、長い目で UDCTak を育てていければと思っています。

▼参加者からの意見

- とてもいい話を聞ける機会なのに、参加者が少ないことがもったいない。もっと地域のネットワークを活用して広報する必要がある。
- 高島平には様々な知識や経験を持った高齢者が多くいるので、そうした人材をもっとまちづくりに活用してほしいと思う。

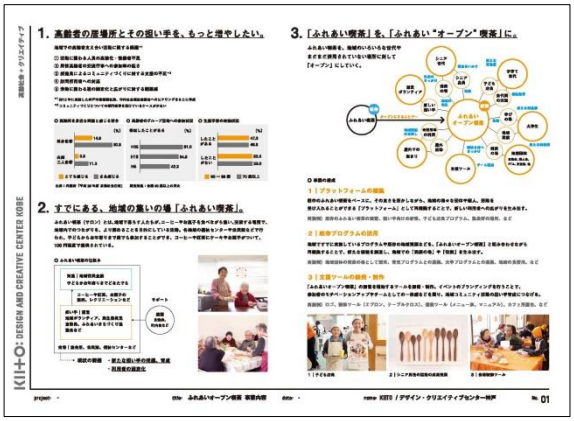
◆第６回「子ども・教育」

日時：2017.03.24(土)10：00～11：30

場所：高島平地域センター　第一洋室

第５回のデザインスクールは、「地域でつくろう！学校ではできない子どもたちのための創造教育の場」をテーマに、NPO 法人プラス・アーツの理事長である永田宏和さんを講師に迎え、全国各地で展開する独特な防災教育の事例等を紹介いただきながら、地域で行う子ども達のための創造教育の場についてお話いただきました。参加者は 31 名でした。

永田宏和氏



◆今後の課題等

今年度は初年度ということもあり、試行的に様々な形式、時間帯、場所でのスクールを実施してみました。全体を通しての課題は広報周知の方法であり、来年度の開催に向けては、できるだけ多くの方の参加を望めるような広報周知の方法、人的ネットワークを確立することが喫緊の課題となっています。

また、スクールを通じて、地域内外の様々な分野の方が交流し、議論することで、新たな活動が生まれ、次のまちづくりへと繋がっていくことが期待されるため、その実施方法についても、様々なテーマを単発で取り扱うのか、一つのテーマに絞り込んで連続講座とするのか等、高島平のまちづくりの熟度や状況に適した企画、運営をしていきたいと思います。

Ⅳ．空間デザインと公共空間の活用方策検討

1．　プロムナード基本構想策定に向けた検討

2．　社会実験

Ⅳ．空間デザインと公共空間の活用方策検討

１．プロムナード基本構想策定に向けた検討

１．検討経緯

昨年度に引き続き、『高島平プロムナード基本構想』への提言へ向けた検討を、UDCTak の下部組織である高島平プロムナード研究部会で行いました。

第１回研究部会（2017 年６月５日）
〇議題
・ゾーン別の整備の方向性について
・先行整備エリアの整備計画案について

▼

第２回研究部会（2017 年９月５日）
〇議題
・整備のストーリーについて
・ゾーン別の整備の方向性について
・「高島平プロムナード（散策道）基本構想」の取りまとめイメージについて

▼

第３回研究部会（2017 年 11 月８日）
〇議題
・高島平プロムナード基本構想に向けた提案・提言について

▼

区への提言

▼

第４回研究部会（2017 年３月 29 日予定）
〇議題
・基本構想（最終版）の実現へ向けた来年度以降の取組みについて（仮）

２．検討プロセス

地域住民を対象とした高島平プロムナード勉強会を実施し、地域意見の把握を行いながら、研究部会で取りまとめた高島平プロムナード基本構想への提言を区に対して行いました。

第１回勉強会（2017 年７月８日）
・参加者：25 名
・検討内容：高島平プロムナードでの活動イメージについて①

▼

第２回勉強会（2017 年８月８日）
・参加者：27 名
・検討内容：高島平プロムナードでの活動イメージについて②

第３回勉強会
（2017 年９月 28 日～10 月１日）
・参加者：41 名
・検討内容：基本構想の内容に関する意見交換
※社会実験と同時開催

３．研究部会での主な意見

第１回研究部会

・多目的トイレはオストメイト対応とし、大人が横になれる折り畳みシートを設置できると、高齢者も出掛けやすくなって良い。
・昼間だけでなく、夜の安心・安全のため、緑地内の照明で明るさを確保できると良い。
・高島平駅がある２丁目の緑地と団地の間にある区道について、歩行者専用道路化等、道路ではなく広場的な利用が可能な取り扱い方について検討を進めてはどうか。
・現況では歩道から公園への出入口が不足している印象を受ける。
・西台駅周辺の人の流れは、今後できる高架下の店舗の内容によって変化すると思う。整備にあたり、都営交通との連携が重要となる。
・若い人が住みたくなるまちとなるために、商業的な観点も必要だと考えている。

第２回研究部会

・プロムナード全体の整備のテーマとして、プロムナードの空間的な良さである重厚な緑をアートや子供の遊びと絡めていくことが考えられるのではないか。
・プロムナードの各エリアが連続し、人の流れが見えるような計画になると良い。
・緑地内はゆっくり緑を感じながら、曲がりくねりながら快適に歩ける環境とすることも大切だと感じる。舗装された歩道の上だけを歩くよりも、歩き方の自由度があると良い。
・新高島平や高島平駅前、病院、緑地に面する商業施設との関係を一体的に考えていくことを示してもらいたい。
・交差点付近だけではなく、森の中にも広場的な空間が散在していると良いのではないか。車いすの方にとっては、長い動線の途中に溜まれる場所があることも重要である。
・タイトルは重要である。今後は研究部会でも議論していきたい。「営み豊かな散策道」といったサブタイトルをつける等、人を惹き付けるタイトルが良い。

第３回研究部会

・基本構想へ向けた提言はプロムナード部会の要望が反映された形でまとめられており、嬉しく感じる。
・動物も含めて暮らしやすい区のイメージづくりのきっかけにプロムナードがなると良い。
・緑地内の適切な場所に水場が配置されていると便利である。
・工事前の計画段階で、動線のユニバーサルチェックを実施する等、ユニバーサルデザインに関する配慮は必要だろう。
・ファニチャーは、場所に蓄積された記憶を継承して活かすことを考慮し、既存のファニチャーを上手く使いこなすデザインへと変えていくことが重要だと考えている。

第１回研究部会の様子

第２回研究部会の様子

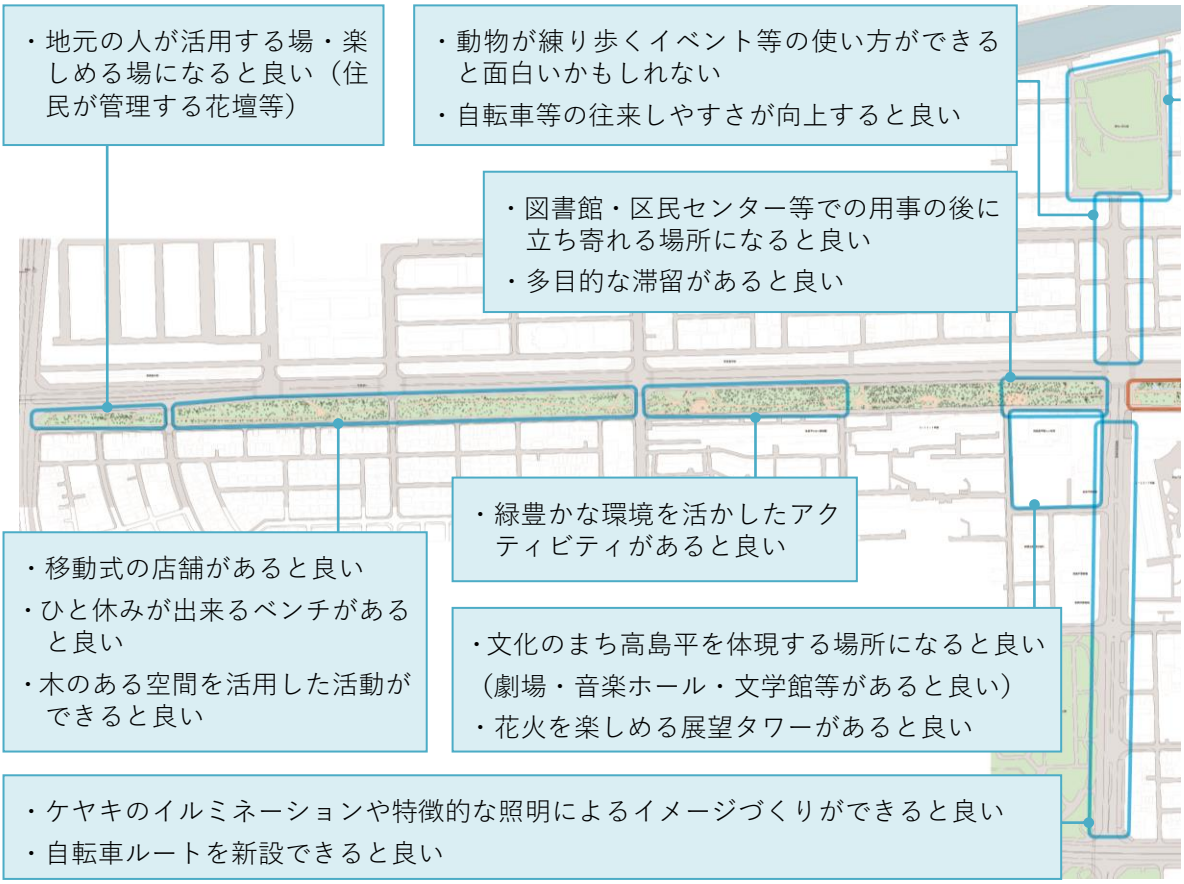
第３回研究部会の様子

４．勉強会での主な意見

第１回勉強会の様子

第２回勉強会の様子

第３回勉強会の様子



＜プロムナード全体に対する意見＞
・安心して利用できる環境づくりや、訪れる動機となる愛着づくりができると良い
・UDCTak や情報発信によって活動を活発化できると良い
・自然との共生・植物や小動物にとっても良い環境になると良い
・ランニングや散歩のため、サーキュレーションを促す整備ができると良い

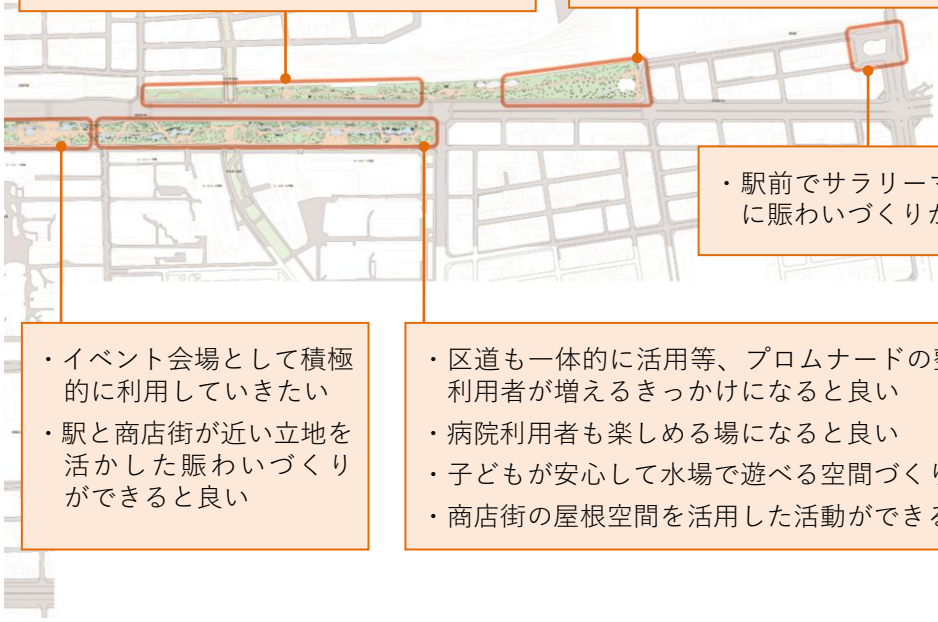
＜プロムナード全体に対する意見＞
・仕事帰りにお酒が飲める場等、高架下が活動できる場になると良い
・子供向けの遊び・イベント・飲食の場等、子供が楽しめる場所にしたい
・緑は基本的に残しながら整備していきたい
・最先端技術の導入等で若者を呼びたい

第１回勉強会での意見　第２回勉強会での意見　第３回勉強会での意見

・子供を呼び込めるゾウや牛、ラクダ等を飼う、果物が食べられる等、もっと親子で遊べる公園になると良い

・住民が管理する花壇や屋外ギャラリー等、行く目的ができると良い
・ベンチはもっとたくさんあっても良い

・日常利用もイベント利用もできる場所になると良い
・子供の遊び場になると良い
・子供が遊んでいる間などに、大人も退屈せずに過ごせる場所にしたい
・子供と高齢者が一緒に遊べる場所にしたい



・駅前でサラリーマンをターゲットに賑わいづくりができると良い

・イベント会場として積極的に利用していきたい
・駅と商店街が近い立地を活かした賑わいづくりができると良い

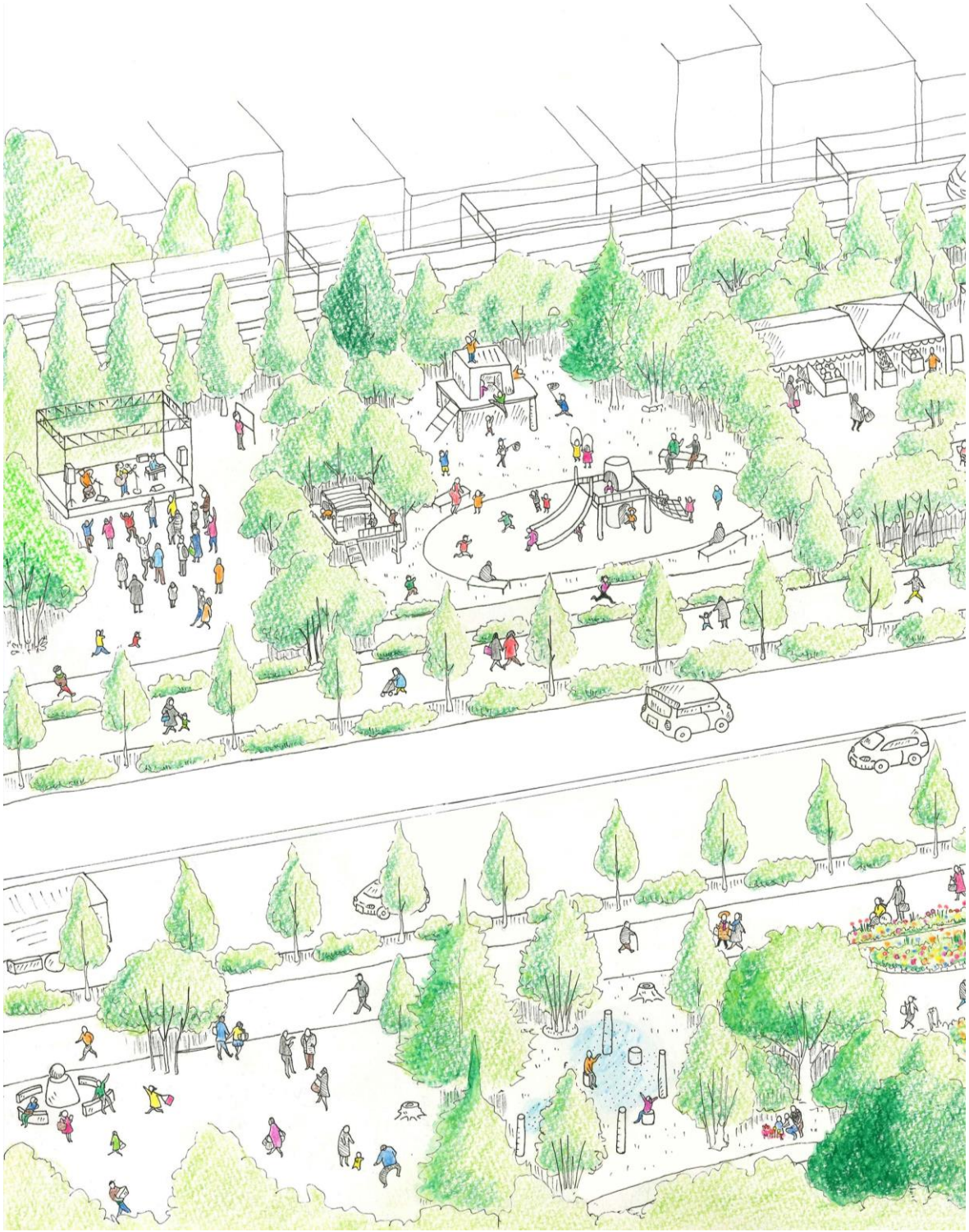
・区道も一体的に活用等、プロムナードの整備が沿道の店の利用者が増えるきっかけになると良い
・病院利用者も楽しめる場になると良い
・子どもが安心して水場で遊べる空間づくりができると良い
・商店街の屋根空間を活用した活動ができると良い

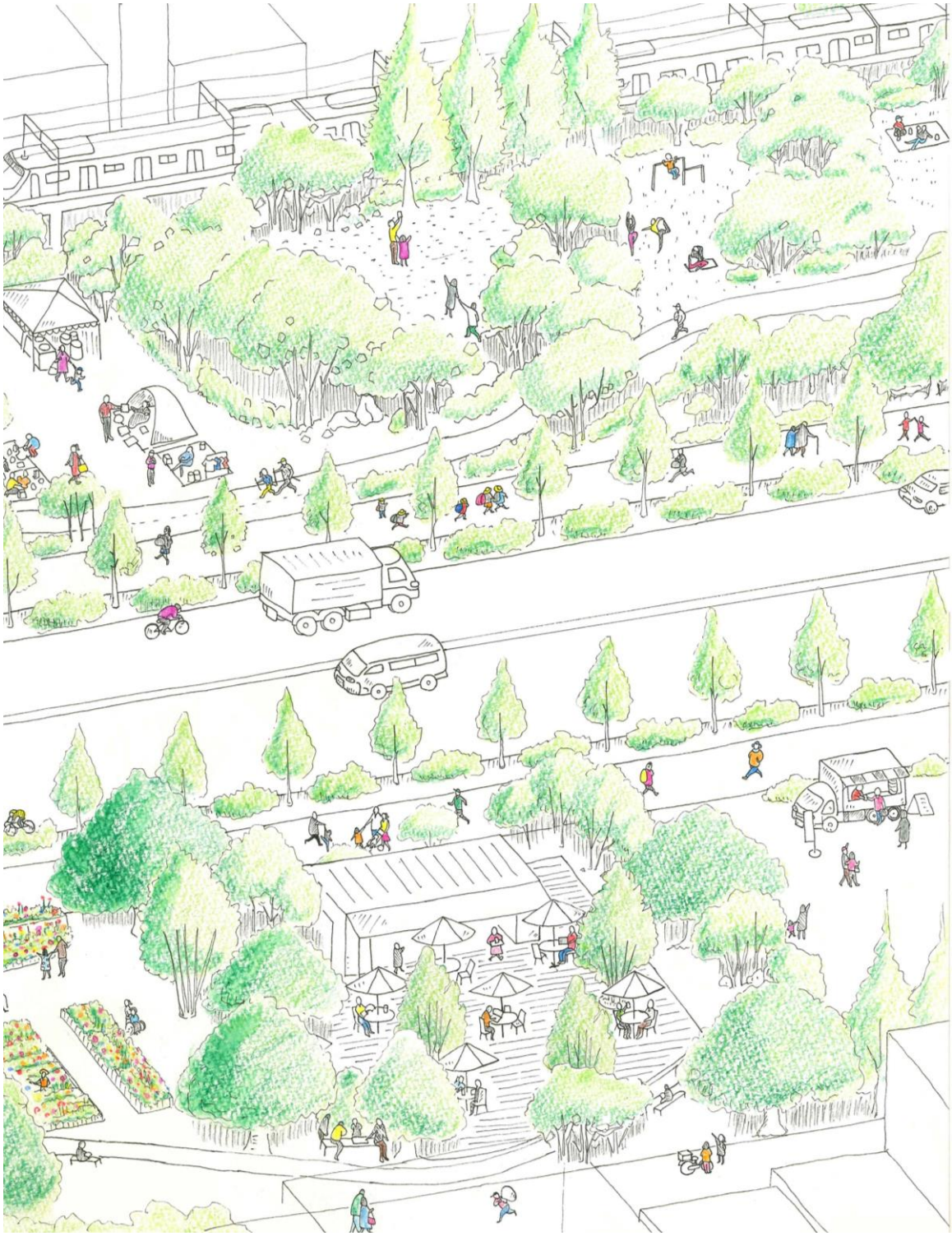
＜プロムナード基本構想の整備方針に対する意見＞

・社会実験のような憩いの場があると良い。
・水辺をきれいにしてほしい。水路は、皆の憩いの場でありとても重要である。
・ベンチ等で一休みできる休憩場所が欲しい。
・誰でも気軽に過ごせるスペースづくりが重要だと思う。
・休憩場所として屋根があると立ち寄りやすいのではないか。
・子どもが遊べる水景施設があると良い。
・既にある空間を有効活用して、うまく生かす視点も大切だと思う。
・外から緑地の中が見えると安心感があって良い。歩行者、自転車それぞれが安心して通行できる道にしてほしい。
・散歩だけでなく、お茶やコーヒー、ビール等が飲める場があると良い。
・気軽に来てもらうためには、お洒落すぎず低価格帯で商品を提供した方が良いかもしれない。
・自分の特技やできることを活かしてUDCTak と連携して活動したい。
・公民学連携の取組みはとても良い。

５．高島平プロムナード基本構想実現後の活動イメージ

基本構想の策定後は、ソフト・ハード両面の取組みを公・民・学の連携によって進めていくことで、多様な活動が生まれる場づくりを行っていきます。





2.社会実験

1．目的・趣旨

2017 年 9 月 28 日（木）から 10 月 1 日（日）の 4 日間、高島平駅近くのプロムナード内の空間にて、にぎわいづくりの社会実験を、今後の高島平プロムナードの再生に向けた「飲食店や滞留スペースの利用需要の把握」や「高島平駅前交番に隣接する広場のにぎわい創出の場所としての適性確認」等を目的として試行的に実施しました。

実施 1 日目は風雨の影響もあったものの、2 日目以降は天候に恵まれ、多くの利用者が地域内外から来場しました。一部店舗では売り切れも発生する等、飲食店舗の売れ行きも好調で、高島平駅前のポテンシャルや賑わい機能導入の必要性が確かめられる結果となりました。

①開催時間

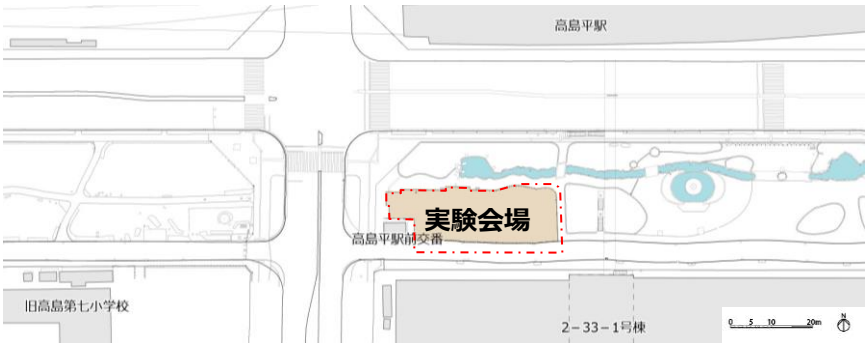
・9 月 28 日（木）11:00～16:00
・9 月 29 日（金）11:00～20:00
・9 月 30 日（土）11:00～20:00
・10 月 1 日（日）11:00～18:00

②実施内容

・ 可動椅子やテーブル等による飲食・休憩空間の創出と飲食店の営業
（4～6 店舗/日）
・高島平プロムナード勉強会の実施
・屋外イベントの開催・展示企画
・各種調査の実施
（利用状況調査、アンケート調査等）

③実施場所

・高島平駅前交番に隣接する広場と区道、緑道園路の一部



④会場レイアウト

・イス・テーブル等による飲食空間／木製パレットによる広場的な滞留空間／人工芝・柔らかな素材のファニチャによる子供の遊びの空間を設け、多様な過ごし方を提供するとともに、区道（会場外）でキッチンカーによる料理の販売を行いました。

・木製のパレットによるベンチは、水路を眺めながら休憩する等、会場外からも利用できるように配慮しました。

・カラフルな家具を会場外からのアイキャッチとして設置することで、会場内に入りたくなる雰囲気づくりを行いました。

・夜間は可動の照明を用意し、飲食時の明るさを確保するとともに、夜間ならではの遊び空間を創出しました。

会場レイアウト図（一例）

2．実験結果

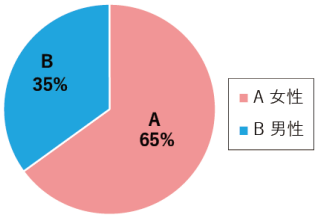
①利用状況調査（目視による記録調査）

・好天に恵まれた 2~4 日目は、1,000 人を超える利用者が訪れました。

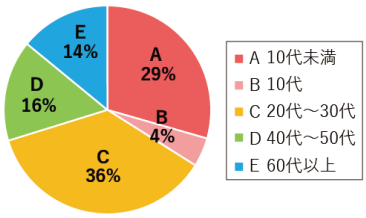
・多くの子どもと保護者（主に母親）が利用し、「女性」「10 代未満」の利用者が多くなっています。

・屋台で料理を買い、テーブルなどで時間を過ごす人が多く、活動内容は「飲食」や「休憩・会話」が多くなっています。

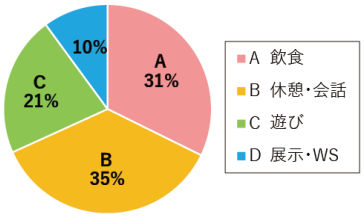
	利用者数(人)	開催時間	1時間あたりの利用者数(人)
9月28日（木）	226	5時間	45
9月29日（金）	1,373	9時間	153
9月30日（土）	1,872	9時間	208
10月1日（日）	1,545	7時間	221
4日間	5,016	30時間	167



利用者の男女比



利用者の年代割合

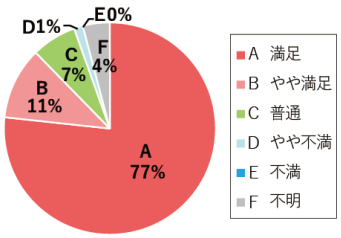


利用者の活動内容

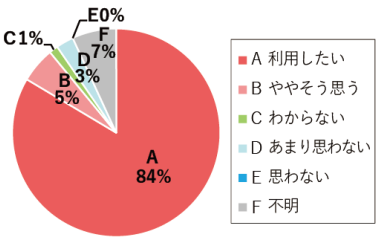
②利用者アンケート調査（聞き取り調査）

・約 9 割の方から、「取組みに満足」「今後も利用したい」といった、社会実験に対する好意的な回答をいただきました。

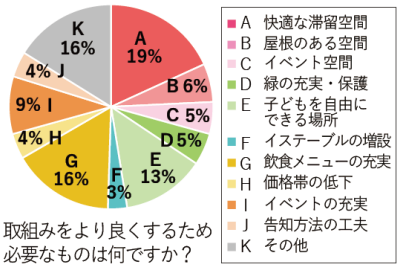
・取組みをより良くするために必要なものとして「快適な滞留空間」「子どもを自由にできる場所」「飲食メニューの充実」といった項目に意見が多く寄せられました。



今回の取組みに満足ですか？



このような空間があれば
今後も利用したいと思いますか？



取組みをより良くするため
必要なものは何ですか？

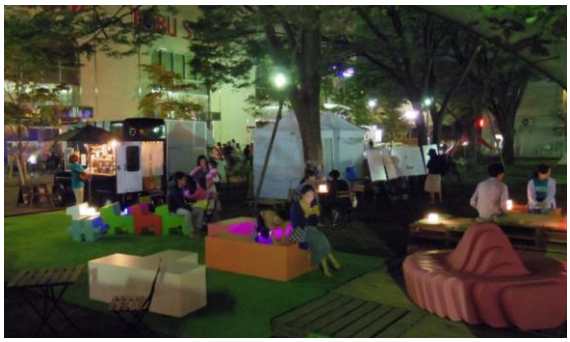
３．当日の様子

区道側入り口から見た会場の様子

可動の遊具を動かして遊ぶ子供の様子

子ども連れで食事を楽しむ母親達の様子

ハンモックで遊ぶ子供の様子



夜間の会場の様子

色の変化する照明で遊ぶ子供の様子

太鼓ワークショップの様子

防災ゲームワークショップの様子

Ⅴ．旧高七小跡地の再整備に向けた調査

Ⅴ. 旧高七小跡地の再整備に向けた調査

1. 旧高七小跡地を含む公共用地の整備研究準備会

本調査が研究対象としている旧高七小跡地を含む公共用地の再整備事業については、板橋区が 2015 年１０月に策定した高島平地域グランドデザインにおいて「地域の都市再生の起爆剤となるリーディングプロジェクト」と位置付けられており、区内外からもその動向が注目されています。

この再整備については、高島平の都市再生の重要な要素と認識していることから、UDCTak として独自に調査・研究に取り組むべく、昨年３月に研究準備会を設置して、検討を開始しました。

2017 年度は、本格的な活用方策の検討に向けた準備として、主に以下の事項について、研究を行いました。

＜2017 年度研究内容＞
◆旧高島第七小学校に関するこれまでの検討状況
◆民間事業者へのヒアリング
◆民間収益施設の導入案の検討に向けた評価軸
◆再整備地区周辺の状況
◆今後の検討の方向性

研究準備会は、出口敦（東京大学大学院教授、UDCTak センター長）、足立慎一郎（㈱日本政策投資銀行担当部長）、山本康友（首都大学東京客員教授）、樋野公宏（東京大学大学院准教授、UDCTak 副センター長）、遠藤宏（高島平グランドデザイン担当課長、UDCTak 副センター長）の５名により構成されました。

2017 年３月～2018 年１月にかけて、計 5 回の研究準備会を開催しました。実施概要は以下の通りです。

◆旧高七小跡地を含む公共用地の整備研究準備会実施概要

開催日	内 容
2017 年 3月 2日	・研究準備会について ・グランドデザインにおける位置づけ及び検討内容 ・ヒアリング対象者
2017 年 6月26日	・ヒアリング結果報告 ・活用案検討に向けた今後の進め方
2017 年 9月 6日	・活用案の検討・評価に向けたポイントの整理 ・評価の考え方
2018 年 1月 5日	・第 3 回における主な意見とその対応 ・研究準備会としてのまとめ

※上記全体会とは別に必要に応じて事務局が各委員と個別で協議・調整をしています。

民間事業者へのヒアリングからは、旧高七小跡地周辺地区は希少性が高く、様々な事業の可能性はあるものの、周辺施設の老朽化、「住宅地」としてのイメージなどにより、そのポテンシャルを活かしきれない状況にあることが確認されました。

これらの、老朽化した施設の多くは、更新時期を迎えていると想定されることから、再整備事業においては公共用地を連鎖的な都市再生の「種地」として活用することが最善であるとし、これらの研究結果をまとめました。来年度予定の検討においても、改めて周辺の状況を整理し、跡地利用に係る事業の可能性と課題を精査しつつ、実現に向けた一定の到達点を示していければと考えています。

Ⅵ．運営・情報発信

1.　理事会・運営委員会

2.　情報発信

Ⅵ. 運営・情報発信

1. UDCTak の運営

UDCTak は、多様な主体が運営に関わることができるオープンな組織で、人・活動・空間・資金を持ち寄り運営する共同運営体制を基本としています。

運営においては、現場における活動のしやすさを尊重し、管理運営のための意思決定機関（理事会）と現場での活動を担う実行部隊（主に運営委員会）との２層構造としています。

▼理事会の開催

管理運営の枠組みを協議する「理事会」は、民・学・公にわたる主要機関（構成団体）の推薦によるメンバーで構成されています。理事会は、デザインセンターの予算・決算に関することを決議する場でもあり、年に１回定例会を開催することとし、その他、随時必要に応じて会長が招集し、開催することができるものとされています。

今年度は９月に定例の理事会を開催し、３月に旧高七小跡地を含む公共用地の整備研究準備会の研究報告を目的とした理事会が開催されました。

2017 年度の実施日は以下の通りです。

＜2017 年度 UDCTak 理事会実施概要＞

回	開催日時
第１回	2017 年９月 25 日
第２回	2018 年３月 14 日

▼運営委員会の開催

運営委員会は、センター長を中心に、副センター長とディレクターで構成され、プロジェクト全体の監理・推進・コーディネート等を行います。2017 年度の実施概要は以下の通りです。

＜2017 年度運営員会実施概要＞

回	開催日時
第１回	2017 年５月 26 日
第２回	2017 年９月５日
第３回	2017 年 12 月 13 日
第４回	2018 年３月 20 日

２．　情報発信

拠点を持たない組織であるUDCTakでは、戦略的な情報発信を行うことにより、ネットワークのプラットフォームを構築することが重要となります。

2016年11月の設立時はFacebook　が主な情報発信手段でしたが、一周年を迎えた2017年11月6日に専用のホームページを開設しました。

また、パソコンやＳＮＳを利用しない人向けの情報発信方策として、「UDCTak News」も発行しています。

ホームページは、できるだけ写真を多用し、内容が一目でわかるようにするとともに、内容を詳しく知りたい方は詳細の情報を負うことができるような構成としています。

UDCTak の概要をはじめ、高島平のまちの紹介や大学等連携プロジェクトの活動報告、デザインスクールや社会実験などのイベントの告知など幅広く紹介しています。

一方、UDCTak のファンや関係者から情報が拡がり、イベントなどへの参加者増加にもつながるよう、情報の拡散、交流のため有効なツールである Facebook も同時に情報をアップしています。

Facebook の閲覧数は少しずつ伸びており、UDCTak の認知が高まっていることが推察されますが、一方デザインスクールなどの参加者の数は伸び悩んでおり、今後の活動においては、地域のネットワークのキーマンとなるような人とのつながり、連携を構築し、これまでの方法（ＨＰ，Facebook、ポスター掲示、回覧板等）に加え、広報周知のツールを構築していくことが課題となっています。

UDCTak
アーバンデザインセンター高島平
〒173-8501　東京都板橋区板橋二丁目 66 番 1 号
都市整備部 高島平グランドデザイン担当課
電話番号：03-3579-2183　FAX 番号：03-3579-5437
E メール：info@udctak.jp
＜本書の一部または全部を、許可なしに複製、転載することを禁止します。＞